

# 教育現場におけるアーカイブ意識の涵養の方法と可能性

森木 三穂

## Methods and Possibilities of Cultivating Archive Consciousness in Educational Sites

Miho MORIKI

(Received on Jan.31,2020)

### Abstract

It is necessary to develop the ethics as a researcher in early education. However, it has not reached the stage of thoroughly educating, understanding, and preserving the preservation of experimental data and research materials. The purpose of this study is to explore the methods and possibilities of cultivating archival awareness in educational settings through the current state of the handling of archives in schools and the survey of students' awareness of archiving.

キーワード：アーカイブ，文献利用，意識調査

### 1. はじめに

1962年、発展する科学技術に対応できる優秀な技術者を求める要望に応えるべく、日本で初めて国立高等専門学校が設立された。国立高等専門学校（以下、高専）は中学校を卒業した15歳から、技術者や研究者を目指す若者を受け入れ、5年間の技術者教育を行う日本独自の教育システムである。学生は普通高校で学ぶような一般科目に加え、工学系大学で履修する実験・実習を重視した専門科目を学ぶ。その中で、数年前より、入学直後の1年生（15歳）から学生自身が自主的に研究テーマを設定して、教員と共同で研究を始める「15歳からの研究者育成」事業をスタートしている。ここで課題となるのは専門知識や研究手法だけではない。いかにして研究者としての倫理観を養成するかが求められる。しかし、実験データや研究資料の保存とその目的を教育し、理解させ保存を徹底するという段階には至っていないのが現状である。そこで本稿では学校（今回は鶴岡高専を対象とする）におけるアーカイブズの取り扱いの現状と、学生のアーカイブ意識の調査を通して、教育現場におけるアーカイブ意識の涵養についてその方法と可能性を探ることを目的とする。

### 2. 鶴岡高専におけるアーカイブズの現状

校内でアーカイブズを扱う部署として、鶴岡高専には「総合メディアセンター」が設置されている。その目的は

センターは、図書及び電子メディア等（以下「図書等」という。）を収集、管理して本校の教職員及び学生の利用に供し、その教育、研究並びに教養の向上に資するとともに、教育用電子計算機システム及びキャンパス情報ネットワークシステムを適切に管理及び運用し、本校における情報処理技術の発展に資するとともに、

マルチメディア教育及びネットワーク利用に関する調査及び研究を推進し、情報処理教育及び情報通信基盤の充実に寄与することを目的とする。<sup>(1)</sup>

とされている。センター員は教職員が務め、任期は 2 年である。5 年ほど前に図書館の改修工事のために多くの所蔵資料が処分されたが、その不要選定および決定の権限は総合メディアセンターの図書メディア部門のセンター員にある。その不用認定の基準は以下の通りである。

図書の不用の認定をする基準は、次の各号の一に該当する場合とする。

- (1) 頻繁な使用等により、汚損若しくは破損が著しく、補修することが不適当と認められるもの。
- (2) 内容が逐次又は改版などにより改訂され、時間的経過によりその利用価値を失い保存の必要がないと認められるもの。
- (3) 重複する図書のうち、保存を要すると認める正本を除いた、それ以外の副本。
- (4) 短期間の利用を目的として取得された図書で、相当期間を経過し、保存の必要がないと認められるもの。
- (5) 内容の古くなった図書で、保存の必要がなくなると認められるもの。<sup>(2)</sup>

この規程に基づき、数年前の大規模改修の際に多くの資料が不用と判断され処分された。廃棄物の中には、判断したセンター員の趣向や意思の影響が全くなかったとは言えない。学校は教員の異動や退職などがあり、当時の購入者にすべてを確認することはおそらく不可能であろう。その中で上記の規程に基づき判断をするわけだが、例えば(4)の「短期間の利用の目的」であったことをどのように判断するのか、(5)の「内容の古くなった」とは、どこを基準として判断するのか、といった点に疑問が残る。貴重だとわかる書籍を除き、古いもので、「自分が必要ないと思うもの」を不用認定して処分した可能性は十分にある。

また、本校は創立して 55 年となるが、その間の学校アーカイブズは総合メディアセンター（図書館）の書庫の一角に過去の卒業アルバムや研究紀要が保存されているのみで、学校としての歴史を保存する部署、担当する教職員はおらず、学校アーカイブズの整備はほとんどなされていない。制服も少なくとも 3 回はモデルチェンジしているが、その軌跡をたどるのも卒業アルバムをめくるより以外方法がない。年々、高専の昔を知る教職員は退職し、過去を語る人もいなくなってきた。たった 50 数年間ではあるが、社会は激変し、高専を取り巻く環境、教育環境も激変した。「過去と現代の「記憶」の記録化はアーカイブズ活動の重要な一部であり、オーラルヒストリーもアーカイブズ資源研究の一研究課題である」と安藤は述べている。<sup>(3)</sup> 高専という日本独自の教育システムを持つ学校のアーカイブズを保存していくことはこれからの教育や地域理解へと還元されると考える。今の資料を史料として保存していくことはもちろんのこと、オーラルヒストリーによって過去を保存する活動を展開していく必要がある。そのためにも教職員のみならず、学生へのアーカイブ意識の涵養により、保存する意識を育て、保存する人材を育てることが重要である。

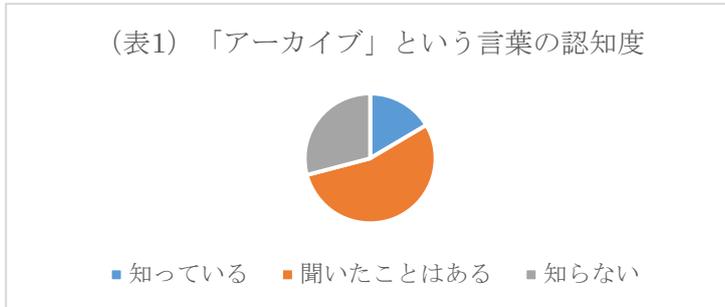
### 3. 学生のアーカイブズ意識の調査

学生にアーカイブに関する教育を行う前に、そもそも、学生における「アーカイブ」の認知はどのような現状なのかを知るために、アンケート調査を行った。対象は平成 30 年度鶴岡高専創造工学科 2 年生（16 歳～17 歳）の 158 名である。創造工学科は、機械コース、情報コース、電気電子コース、化学・生物コースの 4 コースから構成されており、幅広い科学分野に興味関心を持つ学生たちである。

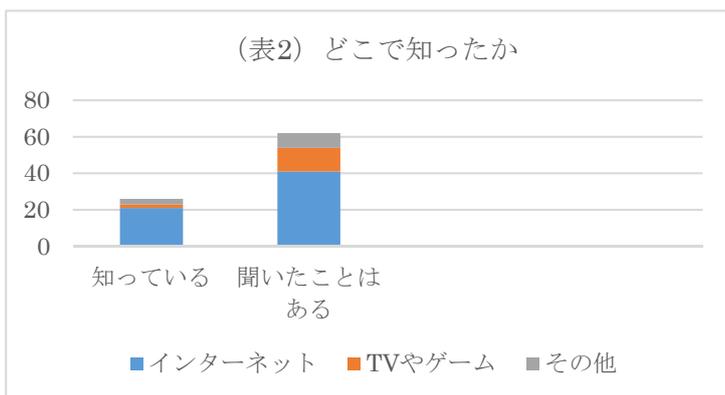
一部の学生は研究室や部活動での研究活動に関わっており、「実験ノート」という研究に関わるデータの記録についての指導は受けているが、ほとんどの学生は学問的な記録保存の重要性についての知識は持っていない。また、記録保存についての授業はなく、社会科・歴史の授業も日本史を中心とした「いつどこでなにがあったか」という歴史的事実を学ぶ内容が中心であり、「歴史的事実がどのようにして今日までに伝わり、残されているか」「どうして私たちは歴史を知ることができているのか」について学ぶような文献についてはほとんど触れられていないのが現状である。筆者の担当する国語の授業では古典を学ぶ際に文字の変遷や参考資料として古文書を提示することはあるが、実際に博物館などで目にしたことがある学生はごく少数である。教科書に掲載されている

文章は筆者が筆者自身の手によってそのまま書かれたものであって、「私たちが目にするのと同じように当時の人々も見て手に取っていた」という感覚を払しょくすることは口頭での説明では難しい現状がある。そこで古典を理解する手立ての一つとして「アーカイブ」について知り、実際の写本や版本を目にすることで内容理解と共に文化理解、技術の発展と継承について学ぶ機会にできないかと考え、アーカイブ意識の調査を行った。

まず、「アーカイブ」という言葉の認知度を三択で確認したところ表1の結果となった。「知っている」：26名、「聞いたことはある」：86名、「知らない」：46名である。ここでの「知っている」の状態は、自分の言葉で意味を説明できるという段階を指す。



次に「どこで「アーカイブ」という言葉を知ったか」については、インターネットの影響が大きいことが分かった。(表2) インターネットの内容としてはYoutubeとInstagramが大半を占めており、その他にはスマートフォンの機能や学校の授業といった回答があった。SNSの機能の中で保存する、記録するという機能を表示するための「アーカイブ」という表記でその意味を理解したという意見が多かった。



また、「古文書や歴史資料を保存する意味は何か」と問うと、

- ・価値があるから
- ・新たな発見があるから
- ・今をよりよくするため
- ・人類が発展させてきた文化であって、忘れてはならないから
- ・後世に伝えるため
- ・過去から学ぶことがあるから

などの意見が出された。教訓としてとらえるべきという考え方の根底には、人間が起こしてきた悲惨な出来事、特に戦争に関する史料の保存への意義がある。また、技術者を養成する学校だからこそ、今の技術に至る過程を知り次の発展に活かす、という未来志向の意見もあった。

そこで、「学生自身の記録史料はどのように保存しているのか」を問うた。すると多くの学生が「把握していない」と答え、「自分で保存している」と答えた学生はごくわずかであった。また、廃棄に関しては自分の意思で行っており、保護者の介入は少ないことが分かる。今回の自身の記録史料として例示したのは、教科書、成績、ランドセル、制服、作文や文集、日記などである。廃棄したものとして多かったのは小学校の教科書やノート、テストなどが挙げられる。廃棄した学生でも「卒業して2年に満たない中学校のものは保存している」という回答であった。一方でランドセルやカバン、制服などはなかなか捨てられない傾向にあり、または捨てるのではなく譲るという方法で手元を去っている場合が多くあった。

すべてのものは一回性であるが、それぞれに対する学生の意識は異なっている。それは教科書、テスト、作文など内容はその時（年）の一回性であるが、学年が上がっても「教科書」も「テスト」も「作文」もまた新しく与えられる。そのため破棄することに対する抵抗が薄いのではないだろうか。一方でランドセルや制服は大抵、一度購入したら再び購入することはない。「制服」は学年が上がっても着ることはあるが見た目が全く異なるため、違うものという認識になるのではないか。また、そのモノにかかった金額や贈答の形態も影響していると考えられる。高かった・誰かから贈られた「ランドセル」や「制服」と、与えられた「教科書」・やらされた「テスト」「作文」では思い入れが異なる。その意識の違いが保存の違いに表れていると考える。

(表3) 保存状態



■ 自分で保存 ■ 親が保存 ■ 自分で捨てた ■ 親が捨てた ■ 把握していない

#### 4. 鶴岡高専におけるアーカイブ教育

以上の現状を踏まえ、鶴岡高専におけるアーカイブ教育としてどのような方法が導入できるかを検討したい。「アーカイブ」を言葉として学生たちは SNS を通して理解をし、自分の投稿や写真などの保存を通してアーカイブの意味を理解している。自分のもの、自分事であるものに対する関心はとても高い一方で、自分に関係ないと自己判断したものに対する関心は限りなくゼロに近い。そのような学生たちにアーカイブ意識を涵養するにはどのような方法が実現可能であるか。

まずは一般教養科目である「歴史」と「国語」における教育である。歴史を物語る資料、古典を物語る資料というものが、「教科書」という活字で表現され、製本されているものでしか知らない学生たちに、実際に現存する古文書や古典籍に触れる機会を提供することがまず、アーカイブを知る実体験として効果的である。また、「国語」の授業を通して、図書館利用や資料の引用について学習しているが、その学習を拡大し、文書館や資料館の活用について事例紹介や実地研修を取り入れたものにすることができよう。「聞いた」ではなく「見た、触れた」の経験的な学びが重要である。

専門科目においては低学年時から実験データの取り扱いや保存、共有に関して自然科学系のアーカイブズの取り組みと現状を学習するべきである。資料保存というと文系の印象が強く、工学系の学生たちは自分事としてとらえることが難しい。そのため、理工学系の内容の古文書を活用した読解学習や、自然科学系のアーカイブズの現状理解など、アーカイブと理工学を融合した内容の学習を導入していくことで、アーカイブ意識の涵養と実際の保存行動への効果が期待できると考える。

#### 5. おわりに

以上、教育現場におけるアーカイブ意識の涵養の方法と可能性について、鶴岡高専のアーカイブズの取り扱いの現状と、学生のアーカイブ意識の調査を通して考えてきた。本稿はアーキビストを養成するような専門性のある教育についてではなく、広く一般の人々がアーカイブに関して認識することが、今後のアーカイブズを残していくことに繋がるだろうという観点から次世代の学生たちへの教育に導入することを検討した。民間史料は一般の人々の認識が重要である。今まで残されてきたもの、これから残していくべきものを、教育を通してその重要性を意識付けさせていくことが求められる。単なる知識の学習ではなく、実際の資料を見たり触れたりすることで、そこに生きた人々の人生を感じることができる。そして自分の生きた軌跡を残すことを意識することもできる。アーカイブ教育は社会や自分の人生と結びつき、「自分はどうか生きるか」を考えさせる教育になるのではないだろうか。

(注)

1. 鶴岡工業高等専門学校総合メディア規程 第二条
2. 鶴岡工業高等専門学校における総合メディアセンター所蔵資料の不用決定に関する取扱要領
3. 安藤正人「1章 アーカイブズ学の地平」  
『アーカイブズの科学 上巻』 国文学研究資料館編 2003年10月30日 柏書房株式会社

(参考文献)

- ・『アーカイブズの科学 上巻』 国文学研究資料館編 2003年10月30日 柏書房株式会社
- ・『アーカイブズの科学 下巻』 国文学研究資料館編 2003年10月30日 柏書房株式会社

本稿は大学共同利用機関法人人間文化研究機構国文学研究資料館主催「平成30年度アーカイブス・カレッジ 史料管理学研修会 短期コース」修了論文（平成31年2月6日修了証書授与）に加筆修正を加えたものである。